

子どもの発達における「甘え」と「反発」の再考  
— 乳幼児への支援と自己の振り返りを通して —

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
高橋 龍

子どもの「甘え」を一括りにして、“これが甘えです”と簡単に言い表すことは難しい。疲れて肌を摺り寄せてくる「甘え」もあれば、欲しいものを買ってほしくて駄々をこねていることも「甘え」と表現する。子どもが見せてくれる「甘え」は、多義的な意味を持ち合わせているように思うが、意味の一つには、「甘え」として表現されている側面、すなわち、子どもと関わっているその人が子どもの表現を見て「甘え」として受け止めることによって子どもとの間で「甘え」が一つのコミュニケーションのツールとして成立していく側面がある。

子どもの発達において「甘え」がなぜ必要なのかについて検討し、どのように「甘え」を捉え、その「甘え」を支援するのかということの研究目的とした。

本研究を行う上で背景となったのは、現代社会が孕んでいる住環境の変化や能力主義と「甘え」の関係である。高度経済成長期を経て進行した住環境における変化は、日本の地域性を大きく変化させた。生活が便利になるにつれ、地域とのつながりはどんどん薄れていった。また、生活の豊かさは、金銭や経済との関連のみならず、能力主義への傾倒に加担した。こうして辿りついた現代社会は「甘え」にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

考察の視点としては、支援の現場における筆者の体験を基に、支援の対象となった乳幼児たちの五感、特に視覚、聴覚、触覚の3つの感覚に着目した。支援の現場における筆者の3事例を通して振り返りを行い、そこから得た知見について述べた。さらに、筆者自身の親との葛藤と向き合ったことで気づけたことも含めて検討を行った。このような視点から検討してみた結果、「甘え」と「反発」は、生涯発達という視点を持って考える必要性があるのではないかと思ひ至り、アイデンティティの形成過程における「甘え」と「反発」の意味についても考察することとなった。また、「甘え」が常に受容されるとは限らず、場合によっては、「甘え」が他者に受容されない場合、「反発」という行為へと変容する可能性も秘めていることは、筆者自身の体験から得られた気づきでもあり、「甘え」と「反発」がもつアンビバレンスについても検討を加えることとした。

以上のような考察を通して、「甘え」が子どもだけではなく、青年期以降にも内在化されているものの、早くから自律を求められる社会の影響によって、「甘え」を意識することが難しくなったことにも言及した。

本研究で採り上げた「甘え」と「反発」の関係を考えることは、「甘え」と「反発」がアンビバレントな関係にあることに気づく契機となり、筆者自身のこころの変容に大きな意味をもたらしてくれた。「甘え」と「反発」の重要性について論じた本研究の成果が、今後子どもの支援の一助になれば幸いである。